

第53回（平成27年度）北海道優良米生産出荷共励会審査報告

一般社団法人北海道米麦改良協会主催の第53回（平成27年度）北海道優良米生産出荷共励会の審査委員を代表して審査の概要を次の通り報告します。

1. 平成27年気象経過と水稻作況

審査結果報告の前に、産米と密接に関係する平成27年度の作柄と水稻生育について、概略を述べます。

1) 作柄について

平成27年の北海道米の作柄は、5年連続の豊作となりました。北海道農政事務所（以下農政事務所）公表による全道の10 μ 当たり平均収量は559キログラム（作況指数104）で、道南方面では「平年並」に留まるものの、主産地の上川（104）、北空知（103）、南空知（106）、石狩（106）などでは「やや良」から「良」となっています。

また、品質面では製品歩留が高く、平成27年12月末日現在の米穀検査実績（農政事務所速報値）による一等米率は、うるち・もち米とも90%前半で、最近では最も高い品質レベルとなっています。一方、ホクレンのタンパク仕分けによる低タンパク米（主要5品種、白米タンパク質含有率6.8%以下）の割合は、全道平均で約37%と昨年並ですが、品種間の差は縮まっています。

2) 水稻の生育について

根雪終日が早かったことと融雪後の好天により、圃場の乾燥が進み、乾土効果による土壤窒素の発現量も昨年並に期待できました。

育苗期間中の好天により、健苗育成とともに移植作業も平年に比べて3日早く終了しました。移植後の活着は早かったものの、6月は中旬まで日照時間が短く最高気温が低く、下旬には天候は回復したものの、生育が停滞し生育量は平年より劣りました。7月は上旬に断続的な低温に見舞われましたが、冷害危険期の前であったことや比較的日照時間に恵まれたことや適切な水管理の実施などにより不稔の多発は回避できました。7月中旬以降の天候回復により、全道平均の出穂期は7月30日で平年比3日遅れでしたが、幼穂形成期後の茎数増加で、最終的には平年並の穂数となりました。出穂期間が高温で経過したため、遅れ穂が多い割には穂揃いはまずまずでした。

登熟は期間の前半が高温であったため極めて順調でしたが、後半の8月中旬以降は低温寡照が続き、籾の黄化は停滞し平年比4日遅れの成熟期となりました。収穫作業は登熟の停滞や断続的な降雨等により長期化するとともに、例年より倒伏が増加しました。

総籾数は平年を下回ったものの、不稔が少なく稔実籾数がほぼ平年並みであったことや登熟前半の高温が玄米の初期肥大を向上させたことで、粒張りが良くなり、登熟歩合の向上とともに製品歩留は高くなりました。

また、食味に関しては、タンパク質含有率はほぼ平年並であったものの、弱勢穂の割合が多い生産物では、やや高めとなっています。

一方、アミロース含有率はやや高めの傾向ですが、例年以上に地域差や個人差が目立ちます。この要因として、親穂を含む優勢穂においては、登熟前半の高温で必要な積算温度を確保した反面、遅れ穂では登熟後半からの温度低下により、積算温度が不十分であったものと考えられます。

病害虫については、採種圃場および生産現場での防除や種子消毒等の徹底により、種子伝染性のいもち病、ばか苗病等の発生は少なく、紋枯病、疑似紋枯症状および他の病害についても大きな被害は認められませんでした。また、例年に比べるとイネミズゾウムシの食害が目立つ圃場も認められましたが、他の虫害については軽微でした。

2. 審査結果

本共励会では、昨年度から移植栽培部門に加え、直播栽培部門（うるち米）が設定されました。本年は移植栽培の個人2部門、直播栽培の個人1部門の合計3部門6件の出展がありました。各地区米麦改良協会がJA、地区農業改良普及センターと協議して提出した推薦調書に基づき、平成25～27年の過去3年の出荷実績や栽培管理について審査、採点しました。

次に受賞者の紹介と具体的な出荷実績、技術内容について述べます。

1) 移植栽培の部

(1) 個人の部

① 第1部（うるち米作付け12ha以上）

◆ 最優秀賞は空知管内奈井江町（新砂川農協）の堀政博氏が受賞しました。

水稻作付面積の70%以上を減農薬等の特別栽培米生産にあて、「ななつぼし」「ゆめぴりか」を中心に生産しています。堀氏が所属しているJA新すながわカエル倶楽部では、収量の基準を8.5俵（510kg/10a）、精米タンパク質含有率の基準を6.8%以下としており、6.8%を超えるとペナルティが科されるなど、特に品質管理には力を入れています。主力の「ゆめぴりか」では、高品質・安定生産を維持しており、地元消費者にもこれらの特裁米は人気が高く、やや割高の価格設定にも係わらず、JAでの売れ行きは上々です。

地域活動にも積極的に取り組み、平成25年からJA新すながわ特別栽培米生産組合副組合長、26年から同メロン生産組合長、27年から同ゆめぴりか生産協議会の技術連絡員として地域を牽引しています。技術連絡員としては、普及センターと連携して、施肥面談における一般生産者への施肥設計に関する助言や、後継者向け技術研修会における後継者への助言など、技術継承活動も積極的に行っています。

② 第2部（うるち米作付け6～12ha）

◆ 最優秀賞は胆振管内厚真町（とまこまい広域農協）の安田憲司氏が受賞しました。

東胆振は稲作の不安定な地域という概念が払拭されるような、高品質・良食味米を生産し続けています。その米作りにおける信念は固く、水田の透排水性改善を基本に圃場整備を進めるとともに、地域全体でも乾田化を進めた結果、春先に乾きが悪い圃場がほとんどなくなりました。圃場管理ばかりでなく栽培技術全般においても基本技術を正確に、丁寧に実施することで、高品質の「ゆめぴりか」「ななつぼし」を安定的に生産しています。

特に低タンパク米（精米タンパク質含有率6.8%以下）が確実に穫れるよう施肥には細心の注意を払っており、収量を抑えてでも低タンパク米生産を自身の基準として設定しており、平成26、27年は全量低タンパク米生産を実現しています。

また、特色ある米づくりを目指し高度クリーン米に地域の仲間3名と共に取り組み、地域の米産地の可能性を高め、新たな販路拡大を図るとともに、「日胆地区ゆめぴりか生産販売プロジェクト」の会長として、当地区「ゆめぴりか」の品質向上を図る活動を展開し、良質米生産の牽引的な役割を担っています。

◆ 特別優秀賞は上川郡東神楽町の西原諭氏（東神楽農協）が受賞しました。

土壌が灰色台地土のため、毎年全圃場で溝きりや中干しを計画的に実施して、透排水性の改善を行っています。また、作土深15cmを心掛けるとともに倒伏させない施肥を心掛け、各圃場の特徴にあわせた肥培管理を実施しています。収量は600kg/10aを安定的に維持し、出荷実績では、全量1等米のみならず、低タンパク米出荷も10年以上連続しています。長年の経験から圃場ごとに肥料銘柄と施肥量を調整することや、ケイ酸質資材以外の資材を使用しないこと、また、使用

農薬も最低限に抑えること等で低コスト生産を実践し、無理をしない米作りで低タンパク米生産を継続しています。

2) 直播栽培の部

(1) 個人の部

① 第2部（うるち米作付け2～12ha）

◆ 最優秀賞は佐藤忠美氏（北いぶき農協・妹背牛町）が受賞しました。

妹背牛町水稲直播研究会の代表でもあり、早生良食味品種「ほしまる」を用いた湛水直播栽培を導入し、小麦栽培・水稲移植栽培との輪作を実践しています。直播栽培の導入理由としては、農家戸数減少に伴い、地域の水田維持のためには1戸当たりの水張り面積増加が必要であることや、春先の労働競合の軽減があげられます。水田の利用法としては水稲の直播栽培、移植栽培、畑作物（小麦）を各複数年（2～3年）ずつ組み入れた田畑輪換を行い、土壌の物理性改善や雑草密度の低下を図っています。

直播栽培の技術的要素をこと細かく分析するとともに、圃場の特徴を熟知した上で自ら圃場の改善を実施して、不安定要素の多い直播栽培の安定化につなげています。水稲直播栽培における高収性、安定性は他の追随を許さない水準にあり、地域ばかりでなく全道の水稲直播栽培のお手本にもなっています。また、直播栽培の「ほしまる」は「タネから育ち」という新たな商品アイテムとして販売されています。

◆ 特別優秀賞は胆振管内今金町（今金町農協）の吉本辰也氏が受賞しました。

檜山北部の今金町において、水稲作付（H25～27年平均で35.9ha）を柱に50ha規模の経営を行っています。経営規模拡大に伴い育苗面積確保が難しいため、一部、湛水直播栽培（H27年6.6ha）を取り入れています。

産官学連携事業で取り組んだ道南地域の湛水直播技術確立に尽力するとともに、地域内および道南直播ネットワークなどでの情報交換を欠かさず、更なる技術向上・生産向上に努めています。具体的には、土壌診断に基づく施肥のほか、「道南地域の栽培マニュアル」に基づく適正な肥培管理を通じ、苗立数の確保、生育促進および生育量確保に努め、直播「ななつほし」の低タンパク米生産（H25～27年平均で6.8%）に取り組んでいます。

平成27年は、「ななつほし」の他「大地の星」にも取り組み、多収性や用途別出荷の対応を検討しています。

◆ 優秀賞は岩見沢市（いわみざわ農協）の徳橋征往氏が受賞しました。

業務用米早生多収品種「大地の星」を用いて、田畑輪換による乾田直播栽培を取り入れた空知型輪作体系により、高い収量性（平成25～27年平均で638kg/10a）を安定的に維持するとともに、水稲、畑作物の健全な生産による経営を行っています。

徳橋氏が所属するJAいわみざわ水稲直まき研究会では、播種・収穫作業等に係わる機械・施設の共同利用・共同作業により、省力・低コスト化を実現して構成員の経営改善につなげています。

本年より、豊正地区の地区協議会（FAM協議会）の会長として、地域全体の組織活動で、リーダーシップを発揮するとともに、水稲直まき研究会の勉強会等の行事へも積極的に参加し、日々、技術の研鑽に励んでいます。

最後に受賞者に共通する技術的な項目について以下にまとめてみます。

ケイ酸資材散布による融雪促進、溝堀りによる表面水の除去や心土破碎および稲わらの搬出に

よる透排水性の改善対策、これらは全て乾田化を実現するための基本技術です。乾田化により土壌物理性が改善され透排水性が向上するとともに、乾土効果が発現して旺盛な初期生育が期待できます。これらは全て収量、品質、食味の高位安定化に結びつく重要な必要条件ですし、北海道米というブランドを維持するためにはなくてはならない栽培技術で、基本技術の実践は必須要件です。

また、健苗育成、適期播種、適期移植、細やかな水管理、効率的な雑草防除、的確な病虫害防除、適期刈り取り、乾燥調製など、生育ステージごとの基本技術の実践が重要なことは言うまでもありません。今回は、有利販売を目指した減農薬栽培に代表される特裁米生産も目立ち、道内米産地の今後の一つの方向性を示していると思われまます。

審査対象となった平成25年、26年、27年はともに豊作年ではあましたが、特に27年は気象条件に助けられた年でした。気象や生育が様々に変動した中で、各自が基本技術を忠実に実践した上で、技術の工夫を重ねて良質良食味米の安定生産に努力していました。その積み重ねによって収量と品質が安定し、北海道米全体の品質向上、評価を高める地道な推進力となっています。

終わりに本共励会に参加頂いた関係者各位の生産努力に心から敬意を表して審査報告といたします。

第53回（平成27年産）北海道優良米生産出荷共励会審査委員長
北海道農政部生産振興局 技術普及課 農業研究本部駐在

上席普及指導員 竹内 稔（農業革新支援専門員）